

浄

monthly JÔDO

土

2014
September

9

宮林昭彦台下追悼特集



「この病を往生の期ごとよろこびて

一心に死をまちて

来迎らいこうをのぞむ心地に

すすめなさせ給たまふべく候さうろう」

良忠「看病用心鈔」より

—— 良く生きることは

良く死ぬことなり——

宮林昭彦著『看病用心鈔のこころ』（発行＝大本山光明寺）より

宮林昭彦台下

追悼特集

浄土宗大本山光明寺第百拾貳世

平成26年7月10日、浄土宗大本山光明寺御法主宮林昭彦台下が世寿82歳で遷化されました。

台下は若かりし頃当法然上人鑽仰会の一時代を担われ、また近年は副会長や理事長の要職をお勤めいただくなど、永年にわたり当会は維持運営に物心両面での多大なご支援をいただきました。その台下への報恩謝徳の意をこの追悼号にて捧げるものです。

南無阿弥陀仏

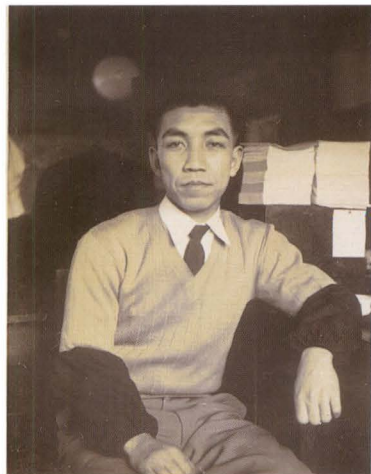
平成20年2月、浄土宗芸術家協会の「浄土展」で
挨拶をされる宮林台下。左は林錦洞上人（故人）



宮林台下は旧制中学→予科
→学部へと進まれた



ブラジルの日伯寺での記念撮影



『浄土』の編集にも携わられていた宮林台下



昭和27年10月からの増上寺での加行中に宮林台下の提案で撮られた記念写真。
上段左から、堀江憲明（東京・江戸川・仲台院 故人）、入井英明（東京・大塚・西信寺）、小沢照雄（埼玉・上尾・馬蹄寺 故人）、下段左から、橋下賢明（神奈川・港南・浄念寺）、宮林台下、菱科光顯（神奈川・茅ヶ崎・浄見寺 故人）、大島文雄（東京・足立・浄光寺）



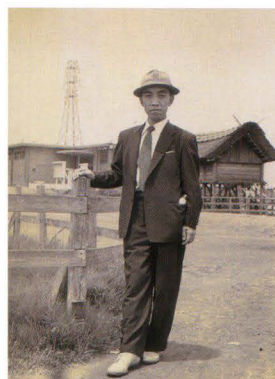
宮林家団らん一枚。奥様、みつ子さんと長男、雄彦君と一緒に。



外国での記念写真

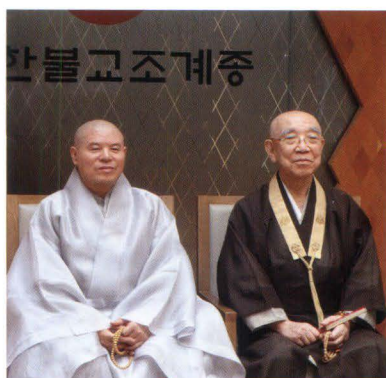
宮林 昭彦（みやばやし しょうげん）台下 プロフィール

昭和	7年	3月	長野県真島町生まれ
	28年	3月	大正大学仏教学部仏教学科卒業
	30年	3月	大正大学大学院文学研究科仏教学専攻 修士課程修了
	30年	4月	長野県更埴市長福寺住職
	35年	4月	大正大学仏教学部講師
	35年		日本印度学仏教学会会員
	36年	6月	神奈川県横浜市大光院住職
	36年	8月	横浜刑務所教誨師
	37年	4月	大正大学助教授
	38年		日本仏教学会会員
	40年		日本宗教学会会員
	45年		日本道教学会会員
	53年	4月	大正大学教授
		5月	財団法人浄土宗奨学会評議員
	57年	11月	浄土宗教学院理事
平成	4年	4月	大正大学浄土宗学監
	4年	5月	学校法人浄土宗教育資団理事
		6月	財団法人浄土宗奨学会理事
		7月	日中友好浄土宗協会理事
		9月	浄土宗開教振興協会理事
	5年	4月	大正大学人間学部仏教学科長
	6年	4月	学校法人大正大学評議員
		4月	浄土宗総合研究所運営委員会委員
	9年	4月	大正大学人間学部長
		4月	日本仏教学会理事
		9月	浄土門主・法主推戴委員 （大本山善光寺大本願）副委員長
	12年	9月	神奈川県鎌倉市高德院（鎌倉大仏） 兼務住職
	13年	3月	大本山光明寺法主就任
		4月	日中友好宗教懇話会副会長
	14年	3月	大正大学退職
		4月	日韓仏教交流協議会会長
	24年	4月	全日本仏教会副会長
平成	26年	7月10日	世寿八十二歳にて遷化



青蓮社大僧正眞譽實阿律道昭彦大和尚

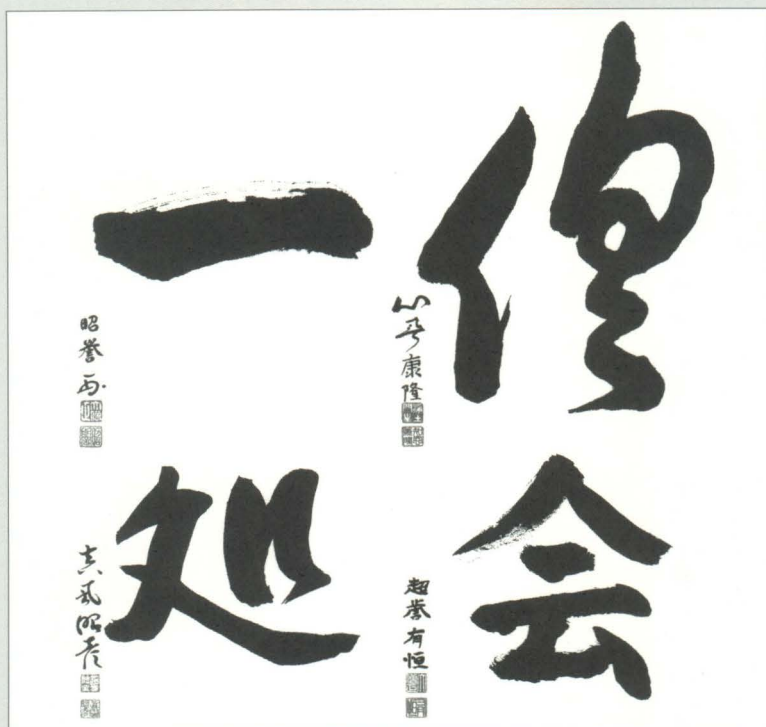
著書 『仏教とその流れ』
『法然上人と浄土宗』
『授菩薩戒儀（浄土宗聖典五巻）』
『授戒』
『鎌倉光明寺の法灯かがやく』
『南海寄帰内法伝』（共訳）
『看病用心鈔』その他多数



写真協力／横浜・大光院 大本山光明寺

韓国で開催された日韓仏教交流協議会にて

宮林昭彦台下追悼特集



当会が昭和10年5月より月刊誌として発行してきた『浄土』が八百号を迎えた記念に、ご縁のある方々に揮毫いただいた「俱会一処」の記念色紙。なお、肩書は平成18年当時のもの。

俱…知恩院 中村康隆 猊下
 会…増上寺 成田有恒 台下
 一…善導寺 阿川文生 台下
 処…光明寺 宮林昭彦 台下

宮林台下を偲んで

法然上人讃仰会会長
佐藤良純

宮林台下と初めてお会いしたのは何時のことであつたか思い出せない。ただ同じ年同じ月生まれでありながら、学年は2年上であつた。父上を戦争で亡くされ早く寺を継ぐ必要があつたので大学予科に入り学制改革の変換期に上級へスライドされたからである。

同じ研究室で同じ指導教授の佐藤密雄先生に師事した。専門は台下が律、私が阿毘達摩と別れ、同じ授業は受けたことがなかった。私は大学院修士課程を終え博士課程へ行かずインドのデリー大学へ行き帰国した時は講師に昇格されていた。それからお互いに定年になるまで学生の指導に当たった。

浄土宗の教師養成講座、伝宗伝戒道場では台下が円戒、私が悉曇を担当した。台下は当初、布教家を目差したこともあって、説教は一流で多くの人々をひきつけた。書にも通じ格調高い筆跡は書の苦手である私には羨望のまどであつた。

上座部の戒律を実践するためにタイの寺院で出家もされた。体じゅうの毛を一遍に剃られたとうかがつた。

外国への研修旅行にも何回かお供した。佐藤密雄先生、竹中信常先生、玉山成元先生などであるが総て遷化された。旅先ではお檀家へのお土産も多くトランクはいつも閉めるのに苦労されていた。

光明寺に入られてからも韓国佛教徒との交流など内外に幅広く活動された。

光明寺の六角堂で一緒に鎌倉の海を眺めたのが最後であつた。極楽でお会いできるかな。

台掌

慈愛の人

宮林昭彦先生を偲ぶ

大正大学学長

勝崎裕彦

平成二十六年七月十日、浄土宗大本山光明寺第百十二世御法主宮林昭彦大僧正台下が世寿八十二歳でご遷化されました。心よりご冥福をすめさせていただきたいと思っています。

宮林台下は、私を浄土宗の僧侶として導いてくださった尊き師僧であり、大正大学において仏教学を教えていただいた学恩深き恩師、先生であります。私は今、「宮林先生」、そして「先生」と心からお呼びさせていただいて、敬慕の思いと感謝の心を捧げて亡き尊靈をはるかにうるわしく偲びながら、私の衷心衷情を尽くして一文を寄せさせていただきま

す。

宮林先生は、仏教の眼目である慈悲の教えをその身に体し、その心に保たれた、本当に慈しみ深く悲れみ深い人でした。人に対していつもやさしく、とても親しみやすく、まことに慕わしい人でした。

宮林先生の語り口はおだやかで、笑い顔は明るく、その立ち居振る舞いの一つ一つにゆとりのある気品と立派な風格をお持ちでした。そしてまわりの人につねにやさしく温かく接して、どなたとも親しみや近しみを別け隔てなくいたされ、気配りと心配りがよく行き届いて、まごころからいたわられる心遣いを、いつでも、どこでもなされておられました。

宮林先生こそ、まさに慈愛の人です。

こうした宮林先生のお人となりは、もとより常日頃から先生自身が倦まず絶ゆまず精進努力してこられた生き方の中でおのずから身に具わり、心に整えられたものであります。しかし私はこれに加えて、先生がご家族やまわりの方々からやさしく、いとおしんで育てられてこられた少年時代や青年時代のご生活ということが大きな要因であると思います。

宮林先生は御父上を太平洋戦争で亡くされましたが、師僧であるおじいさまを中心としたご家族、ご一門の方々からたいへんにいつくしまれて育てられ、また先生ご自身もとても聡明で、だれからも愛される好青年に成長されました。そして先生は、自分が受けたやさしい気配りや温かい心遣いを、まわりの人に大きく広げることができるようなすばらしい人に大成されたのです。

宮林先生は、信州長野県のご出身で、旧制長野中学を卒業されて、大正大学の予科に入学し、仏教学を専攻されて、その後大正大学大学院を修了されました。そして副手として仏教学研究室に残り、昭和三十五年、二十八歳の若さで仏教学部の講師となり、その後助教授、教授と昇進され、仏教学研究室主任、仏教学科長を長く務められた後、平成九年、人間学部長に就任されました。古稀七十歳で退任されるまで、実に四十二年間の長きに渡って大正大学の教壇に立たれ、識見豊富な学殖に根差した親身に満ちた教育によって、多くの学生をやさしく指導し、後進の学徒を温かく育成されました。

宮林先生の学問領域は戒律思想で、インド・中国・日本の三国仏教史における戒律研究の伝統をしつかりと踏まえた研究でした。というのも、戒律学の基本を大野法道博士から学び継がれ、律蔵の蘊奥を佐藤密雄博士から学び修められたことが、先生の学問の中核でした。もとより当時の大正大学の錚々たる教授陣そうそうの多くの先生方のだけれども親しくよく学び受けられたことも多いのですが、大野・佐藤両博士が先生の学恩の二師ということは確言できると思います。

宮林先生の主なご研究は、中国律宗の大成者道宣どうせんの戒律観を中心に戒体論や戒壇論に

ついでの大要を整理し解釈されたことです。そうした戒学に関する基礎的研究を踏まえて、後に生活倫理としての戒律や授戒の心得についての平易な分かりやすい著作を公刊されています。また大正大学の教員海外研修では、タイの僧院において留学研鑽され、これは有名な入竺求法僧の義浄三蔵の『南海寄帰内法伝』の研究につながりました。

宮林先生はこのように大正大学において研究と教育に尽力されてこられたのでありますが、その中で大正大学の浄土宗の教職員の集まりである杏葉会（きょうえ）の同僚の方々と公私の交誼・交友を深められました。後に杏葉会会長・大正大学浄土宗学監（がくしん）になられて、同輩・後輩の方々を大きな心でまとめられたものでした。

そしてもう一つ、本誌『浄土』を発刊する法然上人鑽仰会の同人となり、真野正順、佐藤賢順、佐藤密雄、佐藤良智、中村康隆、竹中信常、真野龍海、安居香山といった諸先生方と親しく交わりながら、長く雑誌編集人・発行人として努力されてこられたのです。

こうして宮林先生は平成十三年に大本山光明寺のご法主として上任されました。法然上人の念仏の教えを良忠上人（りやうちゆう）の伝弘（でんくわう）の心に受けとめて、先生が日頃より提唱されている戒のある生活を実践して、正しい生活倫理に根ざした真摯なお念仏の生活を広くやさしく教え説かれました。

私は今、宮林先生の揮毫された「南無阿弥陀仏」の御名号を拝して、やわらかい筆遣い、おおらかな字配り、やさしさと温かさに満ち満ちた大書の品格に、まさに「書は人なり」の言葉のごとく、宮林先生のすばらしく大きなご生涯を思い、そしてとても慕わしいお人となりになり誠に誠意の心を寄せています。先生のご鴻恩（こうおん）に対して感謝の思いでいっぱいです。

「先生、本当にありがとうございます」と胸張り裂けんばかりに声を大にして申し述べさせていただきます。

実は私自身は、宮林先生のやさしさに随分と甘えてしまったので、先生からお叱りを受けることも多かったにちがいありません。でも、いつでも、どこでも、「先生、先生」と慕わさせていただいてきました。その心は、これからもずっと同じで、はるかに敬慕って先生に導かれていきたいと思います。

宮林先生はご自坊の横浜大光院住職として横浜の地を愛し、ふるさと信州の山河をこよなく愛し、長野の二か寺のお寺を長く兼務もされていました。旅行がとても好きで決して苦になさらず、ご法主になられてからもご親教や国際交流を含めて、日本国内ばかりでなく、韓国、ハワイ、北米ロサンゼルス、そして南米ブラジルへまでも足を運ばれました。もちろん、どこの地域にもすぐに温かく溶け込んで、さまざまの方々とやさしくおつきあいをされました。

人と一緒にいるのがなによりも好きで、しかも人と一緒にいつでも、どこでも楽しく過ごすことのできる先生でした。人を愛し、別け隔てないやさしさをいかなく発揮されて、大きく、ゆつたりとした、すばらしい生き方をされた宮林先生です。

宮林昭彦先生の還来穢国土人天を願い、ご冥福をはるかに祈り申し上げます。

浄土

2014/9月号 目次

カラーグラビア 宮林昭彦台下追悼特集	1
宮林台下を偲んで.....	佐藤良純 6
慈愛の人	勝崎裕彦 8
目次.....	13
法然上人讃仰と浄土の世界	宮林昭彦 14
法然上人のお言葉⑤	梶村 昇 英訳 河西良治 22
連載 響流十方	小村正孝 24
連載 友好の絆.....	森 清鑑 28
連載 蓮門句会（秋彼岸）	36
連載 会いたい人 片岡秀太郎さん（上）	関 容子 38
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子 48
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう 51
編集後記.....	52

表紙・【花写】芝崎純子 陶芸家 浅井竜介 撮影 keizo.S

表紙裏・蓮門句会

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイブス●誌上ライブラリー 一九八三年三月臨時増刊号

と法然上人鑽仰
浄土の
世界

宮林昭彦

一、日本仏教のあゆみ

インドにおいて、お釈迦さまがはじめて仏教を開かれたとき、仏教は、あきらかにインド社会に根強くはびこっている階級制度を打破して、すべての身分別、性別を越えた人間平等の精神に立脚して説かれたのであります。

しかし、その仏教が、シルクロードを通り、中国、朝鮮半島を経て日本に伝えられる間には、それぞれの国や、その時代と社会とに順応して、大きな変化をとげてきました。

仏教が日本に移入されたのは、六世紀の中頃ですが、日本の社会に根を下したのは、七、八世紀のことです。ちょうどその頃は、わが国は律令国家の発展期に属していました。当時の仏教、いわゆる飛鳥奈良仏教は、学問仏教であり、伝統的な神祇信仰とともに、律令国家を護持するために保護されていました。それは仏教思想の本質をなす精神的解脱

の問題は等閑視されて、むしろ五穀の豊穡や病気の平癒を祈る呪術としての使命を果すことがもとめられたのであります。律令の規定のなかには、仏教が民間に伝道して、民衆を教化することを禁止し、これを犯すものには権力をもって弾圧さえ加えたのであります。

平安時代の仏教は、このような権力の統制下から脱却しようとする自覚から生れ出たものです。伝教大師、弘法大師がそれぞれ天台宗、真言宗を開かれた意義は、そのような歴史的事情によるものであります。しかし、その宗派の教団の基礎を民衆にもとめるかわりに、依然として、政府とそれをささえた貴族の間にもとめられて、御用宗教的な役割を一掃することはできませんでした。

律令国家から貴族政治への展開に伴って、天台・真言の両宗派は、貴族階級に支持され、密教の修法祈禱は、社会的な需要にこたえたということもできます。

貴族の支配体制が次第にゆるぎ出したとき、

貴族はいままで通り、現世の榮花に酔いしれてばかりはいられませんでした。貴族から武家への政治体制の移行のなかで、時代がくずれおちるようなときに、榮枯盛衰の憂きめや、あらゆる階級を通じて、だれでも免れることのできない死の恐怖が澎湃^{ほうはい}としておこつてきました。貴族社会の不安があらわになってきたのは、十世紀のころからであつて、浄土信仰も急速に高まってきました。

浄土教によって、はじめて政治的な権力の限界が、宗教的なたちで自覚されてきたのであります。

鎌倉新仏教において、はじめて日本仏教は呪術的性格から脱皮して、仏教本来の精神にたちかえり、「釈尊に還ろう」という大乘仏教徒の理念が、甦^{よみがえ}ったということができます。しかも、新仏教は、かならずしも支配階級に對して、政治的な叛逆をおこし、民衆の社会的な解放をはかるといったような、社会的秩序を否定して、革命をおこしたものではありません。

せん。秩序と現実面において抗争することを避けながら、もつと人間の本質的な問題から、民衆、大衆のために、万民のための仏教が開かれたのであります。

その人こそ、法然上人であります。

このことは、日本仏教の歴史上において、画期的な事実といわなければなりません。やがて、法然上人の影響をうけて、親鸞、道元、日蓮というような、お祖師方があらわれて、十三、四世紀には、新仏教の各宗派はめざましい教团的發展をとげることになります。

二、元祖さまの教えと浄土

法然上人を「元祖さま」とお呼びします。それは、念仏信仰をはじめて開かれたというところから「念仏の元祖」といわれますが、鎌倉新仏教の出現は、まさに日本仏教の誕生であり、その意味からして、法然上人は、「日本仏教の元祖」といわれるゆえんであります。

法然上人における仏教のうけとり方の大きな特色は、一口にいつて、時代の認識と、人間に対する洞察のふかさであります。いまの時代を末法五濁の悪世と受けとり、このわたしは、罪悪深重の凡夫と自覚することであります。

末法という意識は、民衆のあいだにも、時代のくらさを背景として、ふかく人の心にくいこんでいったにちがいありません。そのことが、上人をして、末法の時代に生きる人間性のふかい追求となり、人間のおくそこに潜んでいる、ぎりぎりの心のうごめきの探求に目をそがしめたのであります。

現代の社会生活においても、一見、平和的にみえても、政治倫理の問題、企業体内部における労使のあらそい、家庭内における人間関係のつめたい葛藤など、また繁栄する巨大な社会のかたすみに、孤独さに泣く人々をつぶさにみると、いまさらに人間の心のあり方のむずかしさが思われてくるのであります。

す。

法然上人は、お念仏の教えを説かれる場合に、「仏道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるべきなり」と語られていますように、いつも時代と、そこに生きる人間に注目をされています。

あらそいのない平和な世界の実現ということとは、人類の悲願でありましょう。その悲願実現のために現代の人間はたたかいを続けているといえます。この矛盾を感じないところに、現代の不幸があるのです。法然上人が選ばれた道は、うらむことのない世界の実現、恩讐のかなたの世界にいたる道の追求でありました。

上人の一生は、そのことを実践的に示しています。自分と相手、敵も味方もすべて平等の立場においてみることです。それは自力においてではなく、阿弥陀さまの本願をふかく信ずることにおいて、自分ひとりではなく、衆生ともどもそのすくいにあずかる、という

証しをたてられているのであります。

お釈迦さまは、人間を一切の權威と独断から開放し、そこに人間のあるがままのあり方を自覚し、発見されたのですが、現代においては、お釈迦さまのすがたを、法然上人その人の上に拝み、すくいを感得することができるのであります。

それは、全人類の上に限りない希望をあたえ、人間生活を根本から新しくした人ということができましよう。

わたしたちの生活する現実の世界――差別があり、相対立する有限の世界、これを此岸といい、これを越えた彼岸の世界、み仏の住したもう世界を、「極楽浄土」「浄土」といいます。

浄土とは、すべての苦しみ悩みから解脱した涅槃の世界であります。それは、人生の生死のくさりから解放された、真実の安楽の世界であり、あらそいのない絶対平和な世界をいうのであります。

また、それは、菩薩行の力で出現した功德の世界であり、真に生きぬく働きをもつ生命の世界ということができましよう。このように、涅槃の世界が浄土といわれることによって、み仏の住処である意味が、一層あきらかにされるのであります。

この浄土は、穢土、すなわち現実にわたしたちの住む世界に対してたてられたものであります。人間が、ほんとうに生きる道を失い、煩惱や妄念に引きずられて、不安と焦燥におわれつつ、罪惡をつみかさねてゆく濁乱の穢土に対して、かぎらない光りある生命のかがやく浄土が建立されているのです。

その浄土は、西方十万億土にあるといわれます。穢土に対して、浄土がたてられるとき、その両土の距離は、十万億土のはるかかけはなれた存在といわなくてはならないでしょう。なんとすれば、浄土は、夢想したり、妄想したりして実現しうるものではなく、み仏だけが実現しうる世界だからであり、わたし

たち衆生の能力では、とうてい実現することのできない世界だから、それは十萬億土のかなたといわれるのです。

しかし、阿弥陀仏の浄土が、たとえ十萬億土のあなたにあるとしても、わたしたちのゆくことのできない、あなたではなく、阿弥陀さまの願力によると、それは即得往生であり、一瞬にしてふみこえることができるのであります。しかも、確實で、きわめて簡易にできるのであります。ゆえに浄土は遠くて近い存在ということができます。それは、ただ「なむあみだぶつ」のお念仏のなかに味得されるものであります。阿弥陀さまの願力には、すべての生きとし生ける衆生の願いや、祈りがこめられており、お念仏とともに生活するとき、みずからの力が最大限に發揮されることになります。

三、法然上人讃仰会と『浄土』

法然上人によって確立されたお念仏の信仰

は、やがて、浄土宗の二祖聖光上人（鎮西上人）、三祖良忠上人（記主禪師）と伝承され弘まっつてゆきます。日本仏教の大きな流れのなかには、念仏門としては、直接弟子となり、「師法然の仰せならば地獄へまでも」といわしめた親鸞聖人が、浄土真宗を開かれ、のちに時宗を開かれた一遍上人が、つよく法然上人の説かれたお念仏の指南をうけています。

やがて、日本も封建制度が確立して、身分秩序が動かすことのできないものとなった江戸幕府の統治下の社会において、仏教が国教的に擁護されてくると、かならずしも鎌倉新仏教の精神が躍動的にはたらかず、むしろ枯渇してきました。

そして、幕末維新の変革期における廃仏毀釈のあらしは、神仏分離令が出され、仏教を廃し、釈尊の教えを棄却する運動がおこり、仏教寺院、仏像などが破壊されることとなりました。

このような情勢のなかで近代における仏教

運動の特色は、危機意識が礎となって、仏教護法の覚醒的な動きとして展開しました。とくに大正から昭和にかけての運動は、デカダンス的な風潮と、やがて戦争へ傾斜をしていく時代背景のなかで、訓詁的な解釈の伝道ではなく、生命のかよったものとして、原点に還ろうという運動としてすすめられたのであります。

それは、かつて鎌倉新仏教の「釈尊に還ろう」という叫びが、いま「元祖に還ろう」という時代的要求のなかで、一方には、釈尊を中心とした「真理運動」がおこり、他方では「法然上人の真精神に甦ろう」という旗じるしのもとに「法然上人鑽仰会」が創設されたのであります。

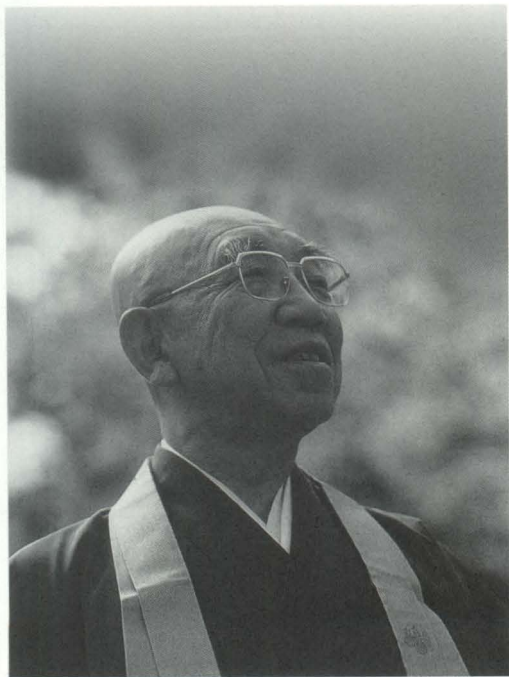
「法然上人鑽仰会」は、大正大学元学長真野正順博士、大本山増上寺執事長中村弁康上人を中心として、大正大学、浄土宗門関係者、「法然上人鑽仰」の趣旨に賛同する一般政財界の人々の参加をえて、昭和十年四月に創立

されたのであります。

その当時、不定期あるいは季刊の信仰雑誌は、二、三刊行されていましたが、本格的な月刊誌は稀有でした。雑誌『浄土』が本会の機関誌として華々しくデビューしたとき、仏教界はもとより、宗教界、一般出版界でも、多いに刮目されたのであります。

『浄土』誌面には、「信仰のみちびき」から「念仏信仰の真髓」などにいたるまで、また広く文芸を通じて、法然上人の崇高な教えが、縦横無尽に飾り立てられたのであります。この『浄土』に文豪佐藤春夫氏が、法然上人の伝記「掬水譚」を、中里介山氏が「黒谷上人夜話」を連載し、また岡本かの子女史や吉田絃二郎氏が常時執筆して、宗内外一般各界に多大の反響をよんで、「仏教ルネッサンス」という言葉が流行したのもその頃でありました。

その後、わが国は、戦時体制に突入し、思想、信仰の弾圧など、暗い重苦しい世相とな



りましたが、「法然上人鑽仰」を通して、念
仏信仰の火はかかげられ、戦後の混乱期にも
消えることなく、常夜灯のごとく、ともしつ
づけられて、今日に至っています。

法然上人のお言葉

ご法語

この宗は、悪人を手本となし、善人まで摂するなり。聖いとう道門どうもんは善人を手本となし、悪人をも摂するなり。

(醍醐本『法然上人伝記』)

現代語訳—この浄土宗は、悪人を手本とし、善人まで救いとり、聖道門は善人を手本として、悪人も救おうとするのである。

Honen Shonin's Sayings

This Pure Land Buddhism looks on bad people as foremost recipients of salvation and extends a helping hand toward good people. Holy Path Buddhism looks on good people as foremost recipients of salvation and extends a helping hand toward bad people. (from *Daigo Edition of the Biography of Honen Shonin*)

解説

前号で醍醐本『法然上人伝記』の悪人正機説（悪人こそ阿弥陀仏が救おうとしている当の人であるという説）について述べましたが、この『醍醐本』には、そういう法語がいくつも出てきます。上人はこの信仰思想をなんとか伝えたかったのではないかと思います。以下、そういう法語をいくつか摘記してみます。

なおここに聖道門という言葉が出てきましたが、上人は、全仏教を聖道門と浄土門の二つに分けました。聖道門は、この世で煩惱を断ち切つて悟りを開こうとする教えであり、浄土門は、浄土に往生して、そこで仏に成ろうという教えです。実際この世で煩惱を断ち切るなどということができませんか。その意味からすれば、これは実現できる教えと、できない教えということになります。

Commentary

In the last issue, I commented on "Akunin Shoki Setsu", the doctrine of bad persons as the very object of Amida Buddha's salvation, which was left on record in *Daigo Edition of the Biography of Honen Shonin*. There are a great number of Honen's sayings of that sort to be found in *Daigo Edition*. It is probably due to Honen's wish to drive this religious thought home to people by all means. I will take up some of his religious sayings below.

To begin with, let me explain here the phrase "Holy Path Buddhism" quoted above. Honen divided all Buddhism into the two groups "Holy Path" and "Pure Land". Holy Path Buddhism teaches that people should attempt to achieve spiritual enlightenment by giving up all earthly desires in the present life, whereas Pure Land Buddhism teaches that people should attain their birth in the Pure Land and then become Buddhas there. Is it, however, really practicable at all to renounce these earthly passions while in life? From this point of view, Buddhism can be divided into the teaching that considers enlightenment in this life to be practicable and the one that considers it to be impracticable.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

ただかまえて同じ仏のくににまいりあいて、蓮のうえにてこのよ
のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をもかたり、たがいに
未来の化道けどうをもたすけんことこそ、返す返も詮せんにて候べき。

（法然上人『正如房へつかはす御文』）

私もあなたさまも阿弥陀さまの同じお浄土に往生してそこでお会いできるのだと
いうことをよくお留めおきになつてください。そして浄土に往生したら、蓮の台
の上でこの娑婆世界での思い出話に花を咲かせましょう。一番大切なのは、ふた
たび娑婆に戻つて人々に浄土の教えをお伝えることなのです。

宮林台下、ありがとうございました

この刻ときがいつかやってくることは、頭ではもちろんわかっていました。かといって、心底受け入れていたわけでも、「覚悟」ができていたわけでも、もちろんありませんでした。だって：ついひと月ほど前の夕刻、親しくお電話でお話しさせていただいたばかりじゃないですか。

「いやあ、こう見えてもボクも案外忙しいんだよね（笑）。あっちこっち飛び回ってばかりで、預かっている原稿、さっぱり校正進んでいない。すみませんねえ（笑）。そうそう、その原稿のことでさ、ちょっとまた相談したいから、アンタ、暇みて鎌倉に来てよ。ご飯でも食べよう」

お元氣そうにおっしゃっていらしたじゃないですか。八月のお盆でも過ぎたらお邪魔しようと思っていたんですよ。

最後にお会いしたのは今年一月二十四日、浄土宗の行事で、増上寺ででしたね。来賓でいらした台下のご案内・ご接待の役だった私に、「おお、久し振り、お前さん、元氣そうだ！ お子さん、いくつになった？ 奥さんも元氣にしています？」と満面の笑みで話しかけてくださいました。

在家の出で何もわからない、しかもやんちゃだった学生一年目の私を、奥さま、そしてご家族皆様と快く横浜のご自坊にお迎えくださいました。寝食すべ

てにございっしょさせていただいた中に、僧侶として、人として、どうあることが、どう生きることが大切かを、理屈でなく、お背中中、そして何気ない会話で、数多く教えていただきました。

生来おつちよこちよいの私は、しょっちゅういろいろなミスをしました。小さいことから大きいことまで……。しかししたいいは笑って「粗忽者そこものですね」と済ましてくださいました。ただ、一度だけ平手打ちが飛んできたことがありました。覚えていらっしゃるでしょうか。

法務の帰り、高速道路で私の不注意により事故を起こした時でした。お寺に帰り、幸い相手方にも自分にも怪我がなかったこと、しかしお寺の車をかなり損傷させてしまったことをご報告・お詫びすると、「車なんかいくら壊れたっていい！ もしものことがあったらどうするんだっ！ 粗忽じゃすまないぞ」と。はじめて見た恐ろしいまでの表情、頬から全身を突き抜けた痛さ、そして衝撃のあまりのよろめき……。今もはっきりと体に残っています。あのとき台下は、あえて不動明王と化されたのではなかったか、そう思っています。

卒業論文を書きながらも、正直、将来への見通しや希望が霞みつつあった大学四年の夏。卒業後は母独り残る田舎に帰り、どこかに就職をと考えている旨

をおそるおそる話すと、「まあ、帰るのはまだ先でもいいんじゃないですか。それよりお前さん、院に行っても少し勉強したら」と、いつにもましておだやかな口調で進学を勧めて下さいましたね。思いもよらないお言葉に甘え、小さい頃から母子家庭で育った私などには想像すらできなかった進路を歩ませていただくことになりました。そんな「粗忽者」で「やんちゃ」だった私が今日こうしていられるのは、まったく台下のご指導とみ心によるものにほかなりません。

広、深、恕、慈、優、柔、歓……どのような字をもつてしても、とても表しきれない台下にお会いできなくなったこと、いまだに信じられません。

いつになるか、それは阿弥陀さまのみ知るところとは思いますが、いずれ私もお浄土にお邪魔させていただく日が参ります。その時にはまた、これまで同様にお声をおかけ願えればありがたく存じます。

その日まで、いただいた御恩に万分のいかでも報いられるよう励んで参りますので、どうかお見守りくださいますよう。心より莊嚴浄土をお祈り申し上げます。

合掌（小村 正孝）

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第四回

森清鑑

御宿から大多喜城下町へ

御宿岩和田で遭難し、村民に助けられたロドリゴ一行三百十七名は、村民の家での分散生活にも慣れ、交流も日増しに高まった。約一ヶ月後、大多喜の殿から連絡があり、全員、大多喜城下に引き取られることになった。なにしろ、村民三百名の御宿寒村が、三百十七名の面倒を看たのであるから、いくら殿から物資の援助があったとはいえ、村民にとつては大変な苦勞である。しかし、御宿の人々は、不平を鳴らすどころか、熱き心で異国人に接した。言葉は分からずとも、以心伝心で会話が成り立つようになり、彼等の衣類は洗濯、繕われ、日本の食生活にも親しみ、特に酒をこよなく愛する者も出た。指揮を執った名主の岩瀬家が酒の醸造を生業としていたことも大いなる糧であった。現在も続く岩瀬家の醸造、井戸から汲み上げる生鮮な水で造られる、清酒「岩の井」は絶品である。そしてその母

屋の天井の梁は、太い。これこそが、ロドリゴが乗っていた、サン・フランシスコ号のラストなのである。

座礁、損壊した船の荷、破片は全て片付けられ、倉庫に保管された。御宿で三十七日間、救助されたイスパニア人達は、遠路はるばる大多喜へと向かう。世話になった村民達と泪の別れを告げ、約八里強の道を北へと移動した。

大多喜城

大多喜城下では、殿、本多忠朝の下知のもと、宿、大商家、寺等の協力を得て、異国人の住まいを割り当て、準備万端、開けて待っていた。領主、忠朝と領民との日頃の親密な関係をここでも垣間見ることができる。

ロドリゴは城下町の賑わいを見て驚く。南北に連なる城下町通りの左右には、宿、陣屋、大商屋などが軒を並べている。自分は、その一つに居住しているのだが、ほぼ城下町通り

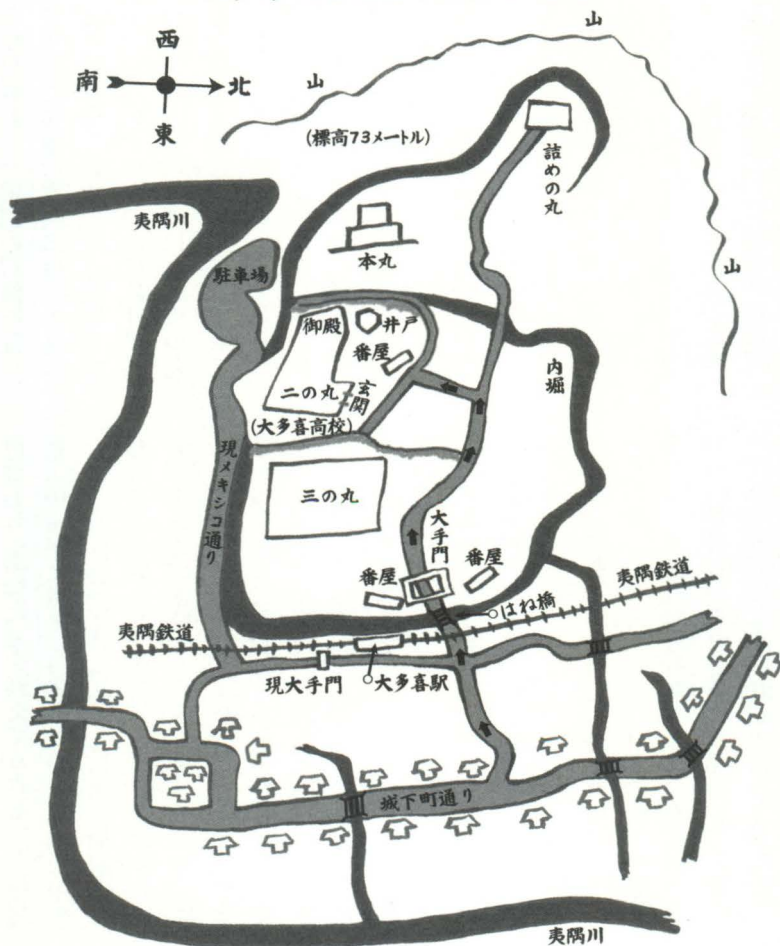
の中央である。この目抜き通りを左に歩けば、右側の城郭から一本細い川が流れ下っており、道を跨いで東に下り、下に流れる夷隅川に注いでいる。その先は夷隅川を突っ切って南へ続く。夷隅川を渡った後も、道の左右には、まだ民家や商家が連なっている。今度は宿を出て通りを右へ行くと、左上城郭から二本の川が流れ落ち、やはり道を突っ切って右下の夷隅川に流れ込んでいる。

ロドリゴ一行が大多喜に到着すると、殿、忠朝の使者が待ち受けており、殿から「遠路、ご苦労。近日、城に向いて欲しい」との伝言。使者は、てきばきと三百十七名の宿を配分し、ロドリゴはようやく落ち着いたところである。そして主立った数名を連れ、城へと出向く日がやってきた。

ここで当時の大多喜城郭の様子を表していると思われる、元禄年間に描かれた伝来絵図をもとに、再現してみよう。ロドリゴ達は、城下町通りのほぼ中央から上（西）へと登る

城へのメインルートを行く。この先は山に向かう上り坂。城郭は、城下町から見るととにかく高い。家来達に案内され、城下町通りからちよつと行くと、まず、第一の門がある（駅の近辺）。これを通過すると、眼前に深い堀があり、跳ね橋が架かっている。緊急時には、この跳ね橋が上がり、敵の侵入を防ぐ。つまり、ロドリゴの時には、これから山に登って展開する、城郭全体を内堀が囲んでいた（この堀が今は道路と化している）。堀の深さは十メートルを超えると彼は記している。この跳ね橋を渡ると、眼前に頑丈な第二の門がある。これが大手門で鉄締めがふんだんに使われた枡形門であったと想像される。その位置は、ちょうど今の夷隅鉄道大多喜駅に向かつて、右上になる。門の周囲は、高さ五メートルほどもある城壁に囲まれている。鍵型の門を潜って出ると、長型の番屋があり、百人あまりの兵士が詰めている。ロドリゴ達は、槍を持った家来三十名ほどに礼儀正しく挨拶

大多喜城古地図(元禄)と現代



大多喜城と城下町 元禄年間古地図

され、城へと案内される。城郭の右側を縫って登る道を行く。この道の左側には三の丸の館があり、城壁に敷切られたその上には二の丸御殿がある。さらにその上の山奥には、天守閣を含めた本丸。本丸の背後には詰めめの丸を備えている。これら全てが内堀に囲まれているとあって良い。堀水が流れ、さらにその内側には、落ちたら底のどがった石にぶつかり、けがをする空堀があちらこちらに設けられている（空堀は、その存在が見分けにくいようにできている）。

大多喜の殿、忠朝が普段政務を行っていたのは、この二の丸御殿（今、大多喜高校）であろう。したがって、ロドリゴ一行もここに通されたと思われる。大多喜城の家来達に従って、三の丸をやり過ごし、ちよっと上に登り、左に折れる。すると鉄で覆われた堅牢な門があり、兵士が一杯詰めている。二の丸の館が建ち並び、奥の本丸沿いに御殿がある。殿は二十人ほどの家臣と共に玄関で待ち受

けており、あなた方を迎えてうれしいと挨拶。数名の家来に屋敷を案内させ、殿のいる屋敷に着き、席に着く。ロドリゴは、「部屋は金銀の細工で彩られ、彩色は美しく、床から天井に至るまで素晴らしい」と評している。殿は、大御所、家康の考えをロドリゴに伝え、江戸城にいる二代將軍、秀忠の意も同じ。数名の部下と共に江戸、駿府を訪問し、直接会うように準備していると語った。それはロドリゴにとって夢かと思われるほど感謝の念を湧出させずにはおかぬものであった。その後、殿は武器庫にまで案内し、ロドリゴはここでも立派さに驚き、殿のいる御殿で晚餐の場に案内される。一膳目から次々と料理が運ばれ、殿は舞いを披露、一行は歓待された。

それからしばらくして、日本の武士の服装をした、異国人が大多喜を訪れ、殿に紹介される。彼はにっこりと笑って握手し、大御所家康様の通行証と朱印状を手にした。ロドリゴはイギリス人と聞いて、身を固くする。



初代、本多忠勝が掘った大井戸。水量が豊富で「汲み尽くせぬ井戸」といわれた。本丸から二の丸跡（大多喜高校校庭）を見下ろす位置。

なぜならイギリスとスペインは、戦いのさなかにあったからである。しかし、そのイギリス人はそんなこと意にも介さず、大御所の意志を伝え、大御所の通行証と朱印状を手渡し、自分の身の上話、つまり大御所に救われた話を語って聞かせた。この人こそ、ウィリアム・アダムス、三浦按針であった。

ウィリアム・アダムスは、大御所家康の意を伝える。大多喜の殿、忠朝から聞かされていたことを正式に伝えに来たのである。要旨は四つである。まず、忠朝は我が意を汲んで、善くぞ、貴方たちスペイン人を助けた。これが私の本意である。第二は、「海岸に打ち上げられた船の財産は、全てドン・ロドリゴ達

の所有とする。したがって自由に処分せよ」。ロドリゴは改めて驚く。これは、異例のことである。当時、全ての国で、遭難、座礁した船の残留物はその国に没収される、というのが通例であったからだ。それをロドリゴに全て与えると云うことは、勝手に処分してよろしいということである。後日、ロドリゴは悩んだ末に、受け取った、収納倉庫の鍵を船長セピコスに渡し、回収した全てのものをヌエバ・イスパニア（フィリピン）に戻し、売却処分したらその売り上げをマニラの持ち主に渡すように命令した。ロドリゴがこうするであらうという、高貴な判断を家康は見抜いていたのである。第三が、將軍秀忠がいる江戸城と大御所家康がいる駿府城を訪ねること。そのために、安全に旅するために家来をつけ、家康の通行証と朱印状を渡すというのである。その道中において、その処、処の領主がロドリゴ一行を歓待し、必需品を時には提供するなど、幕府の重臣に申し伝えてある。さ

らに家康は、大多喜の殿、本多忠朝とこの書状を持参したウィリアム・アダムスは、私が最も信頼している家来であることを伝えている。ロドリゴは、殿からすでに聞いているとはいえ、この国を支配する徳川家康から、御宿に遭難してから今まで予想だにしないかつた、このような歓待意志を直接、聞かされ、感動のあまり涙した。これから約一年後、太平洋を横断、ヌエバ・イスパニアの首都メキシコ・シテイに帰るためには、このウィリアム・アダムスの援助なしには実現しなかった。ここで、ウィリアム・アダムス、三浦按針が日本に漂流遭難し、家康に助けられ、家臣となった経緯を語らねばならない。



本丸の模擬天守閣

蓮

門

句

会

ありがたき夕日に気づく秋彼岸

深呼吸秋念仏の一会かな

月を見て仏性を問う深思かな

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

夕月の沈み漁火数増せり

新発意の鐘撞いてゐる秋彼岸

常照我額掲げある秋彼岸

山崎龍道

(天草熊本・遣迎寺)

テーマ 《秋彼岸》

行正明弘

(福岡糸島・正覚寺)

大いなる月押しあぐる華頂山

月連れてとのゐへまかる山の僧

復興の祈り一本松の月

佐山哲郎

(東京根岸・西念寺)

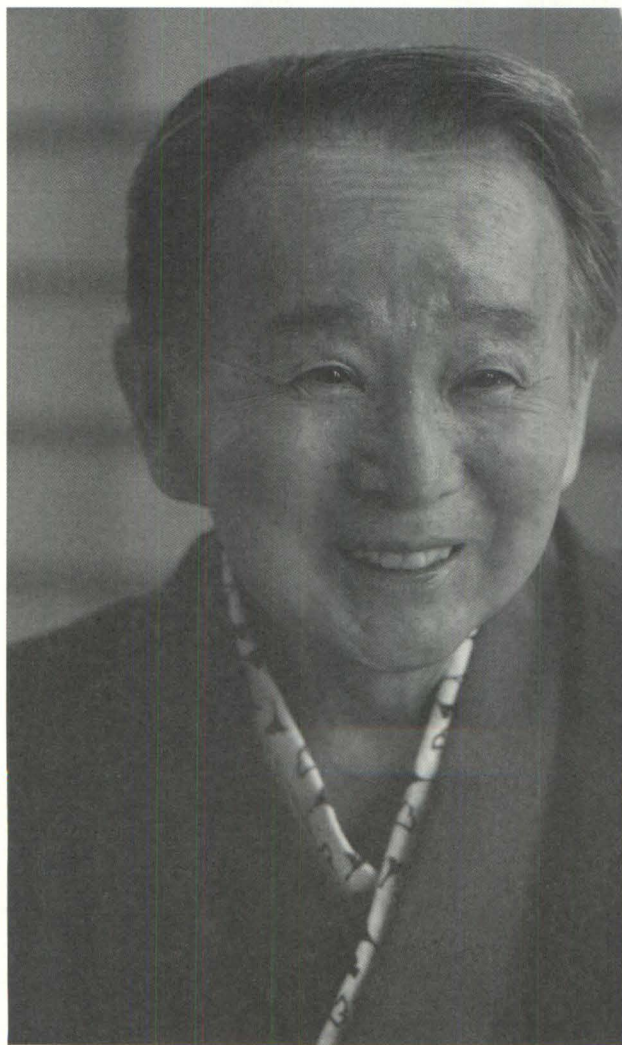
無縁墓またひとつ増え曼殊沙華

仄暗き書院にぼつり扇置く

彼岸にありて無月を名乗りをり

連 載

会いたい人 関 容子



片岡秀太郎
さん

上

撮影／タカオカ邦彦

今、これほど濃厚な上方の色香を漂わす女方は、秀太郎さんをおいてない。

「封印功」(『恋飛脚大和往来』)の飛脚屋忠兵衛と恋仲の遊女梅川、「河庄」(『心中天網島』)では女房持ちの紙屋治兵衛と相愛の遊女小春など、情の深いゆえに運命に翻弄される女の哀れをはかなげに描き出す若き日の秀太郎さんにはうっとりさせられた。

近ごろでは「封印功」だと井筒屋内儀おえんとか、「吉田屋」(『廓文章』)では吉田屋内儀おきさとかの花車方(年増の役)に廻ることが多いが、前に演じた哀れな女の役々が身につについて、酸いも甘いも噛み分けて人情も分別もある色街の女のいい味わいをかもし出す。自然体でさらさら進んで時折ねつとりとする語り口調と雰囲気、昔私が好きだった我童(十四代目仁左衛門)の舞台を思わせることがあって、ますます秀太郎最良になる。

その秀太郎さんが久々に若い役を演じたの

は平成二十四年、亀治郎改め四代目市川猿之助襲名披露狂言「四の切」(『義経千本桜』)に花を添えた静御前だった。しかも初役、だという。

花道から登場した静を観てまずさずがと思ったのは、はんなりとした色気があって可愛らしく、義経の「正妻」ではなく「愛妾」になつていたこと。そして芝居が進むうちにまたまた感じ入ることがあった。それは佐藤忠信が本物か、狐が化けたのか、静が詮議するところで、これまで観た大抵の静は扇でトントンと欄干を叩いて忠信を自分のほうに向かせる。これがなんだか偉そうに見えて、私はちよつといやだった。ところが秀太郎さんはこれをしてない。そればかりか義経にこれまでの経緯を話すときに、そこに忠信がいなくても呼び捨てにせず「忠信殿」と言っていて、まことに優しい静だった。

秀太郎さんに会うなり、そのことを言う。

「そりやだつて、忠信は自分の家来じゃない



秀太郎さんの初役となった「四の切」(『義経千本桜』)の静御前。
(撮影／掘出恒夫)

んですもの。静はあくまでも白拍子でなくちゃね。だから面と向かって『忠信、やらぬ』と斬りつけるとき以外は、忠信殿と言ってます。扇でトントンとするのも決して間違いないんだけど、私は自分の感じで強く叩かないようにしただけ。

猿之助さん襲名で（坂田）藤十郎のお兄さんが義経で私がこの役を頼まれたときは、体力的に自信もなくなってしまうかと思うたけど、なんとか千秋楽まで演じきり、またおねがいします、って言われて嬉しくて、顔見世まで入れて結局六公演くらい演じてしまった。若い役やってたらだんだん元気になってきましたからね（笑）。女方って、そんなものなのかもしれない」

古典歌舞伎には演出家がないので、演じる人が相当の地位であれば、その感性で役の解釈を変えることもできる。これは静の「秀太郎型」か。

「私にはね、嫌いな役とか、言いたくないせ

りふというのがかなりありますよ。

たとえば『実盛物語』の葵御前が、前の幕であれだけ小萬の世話になって、源氏の白旗まで死守してもらったというのに、その子供が自分の子の家来になりたいってときに、一つの功を立てなきゃ家来にしない、なんて、よく言いますよ（笑）。直接自分のせりふでは言わないけど。もつともそれがなきや瀬尾が孫に討たれて死ねないから、まあ仕方ない。

一番いやなのは『七段目』（『仮名手本忠臣蔵』のおかるのせりふ。もつたいないが父さんは非業の死でもお年の上……って片づける。それはないでしょう、って言いたくなる。あまりに無神経じゃないですか。私はお父ちゃん子だったから余計このせりふがいやなんです。理屈で考えると、いやなせりふはいっぱいありますけど、そこはさらいといかないと役者やってられませんから」母が「それが抵抗なくできないと歌舞伎役者になれない

よ」と言っていました。

秀太郎さんは昭和十六年九月、十三代目片岡仁左衛門の次男として大阪の住吉で生まれました。八人兄弟で、兄に五代目我當、弟に孝夫、のちの十五代目仁左衛門がいる。

「父は家では本当に優しく、いいお父ちゃんでしたよ。芝居から帰ってくるのをみんなで待っていて、今日は芝居でどんなことがあったか、話を聞きながら一緒に御飯を食べるんです。お父ちゃん、僕、見に行ったらこんなふうにしてたやろ、って私が狐忠信の真似をすると、その手は猫やで、狐はな、握るときに小指を中に入れるんや、そしたらこぶしが尖って狐の手に見える、と教えてくれたのを今もよく憶えています。」

芝居には爺さんも婆さんも、侍も太鼓持も、年増も娘も、芸者も中居も、いろんな役がある。だからいろんな声を出さんとあかん。はい、お姫さんやってごらん、と言われてやら

されたり、毎晩芝居を教わる寺子屋でした」

初舞台は終戦から間もない昭和二十一年の十月、京都南座。父仁左衛門が当り役の伊左衛門で『吉田屋』の禿かぶの役。名前は本名の片岡彦人よしひとのままだった。

「私は女の子の役なんて最初はいやでね。お父ちゃんみたいな立役の役者になりたいと思ってましたから。お弟子が化粧かおをしにくると、いややと言って逃げ回ってました。でも何日も綺麗な赤い衣裳をつけて禿の役をやってるうちに、だんだんその気になってきて、女方正ただうぽくなってくるから不思議なものですね」

秀太郎さんの「彦人」は名子役の誉れが高かったと聞く。『盛綱陣屋』の小四郎、鰻谷の「おはん」、どんどろの「おつる」、「実録先代萩」の亀千代や千代松。谷崎潤一郎の少将滋幹の幻年期など、子役が活躍する芝居の主な役をたくさんつとめている。東京での初お目見得は「壺坂」の観世音。

『壺坂』の観音様と言えば、取つときの話

があるの。私はかの名高き名優六代目菊五郎のおじさんの、最後の晩餐に同席したんです。

昭和二十四年の六月末に、両親と祖母（十一代目仁左衛門夫人）と私と四人で、新橋演舞場の近くにあった六代目さんのお宅をお訪ねしたんです。二階の病間に通されて、小父様は病気で寝ておられましたが、布団の上で「夏祭り」の国七の片足を上げた「見得」を見せたり、いろいろ教えてくださっていました。一段落すると、一緒に食事をしたことになって階下のお座敷でお待ちしていたのですが、小父様は階段の上でしゃがみこみ、降りる事が出来ないということで、また私たちが上へ行って、一緒に鰻をいただきました。その時の鰻の美味しかったこと。

六代目が亡くなったのは東劇の初日があいて間もない、七月の十日でしたから、多分あのときがお客と食べる最後の食事だったと思いますね。そのときの私の役が、お父ちゃんさわいの沢市で『壺坂』の観音様だったわけなんです。

す。ほかに『宮本武蔵』もあって、二代目猿之助（初代猿翁）さんの武蔵、お父ちゃんの佐々木小次郎、富十郎（当時鶴之助）さんがお通をやってました。城太郎少年の役を団子だんこ（二代目猿翁）さんがやっていて、あの方は私より二つ年上ですが、うまいなあ、とつくづく感心して見てましたね」

秀太郎さんの父十三代目仁左衛門は戦前のころ、東京に住んでいたことがあって、今は伝説となつている名優たちに積極的に教えを乞うていたという。

「美男で名高い十五代目羽左衛門さんや六代目のおじさん、初代吉右衛門さんも崇拜して、いろいろ教えてもらったそうです。中でも七代目幸四郎さんで、今の幸四郎・吉右衛門兄弟の祖父に当るお方には、『助六』や『勧進帳』の弁慶をみっちり教えてもらっていて、またお父ちゃんは頭がいいから何十年も前の若い時の事を、年をとつてもそれを全部憶えているんですよ。ですから七代目さん

「冥土の飛脚」「封印切」で遊女の梅川を演じる秀太郎さん。



の御子息たち、高麗屋三兄弟の十一代目團十郎さん、八代目幸四郎（白鸚）さん、二代目松緑さんの弁慶は、七代目さんがだんだん年取っていらつしやる分、動き方も違ってくる。お父ちゃんが習った弁慶がお元気なときの弁慶だったそうです」

そう言えばまだ若いころに、松嶋屋三兄弟で『勧進帳』をつとめたことがあると聞いた。

「ええ、兄の秀公（ひできみ我當）と弟の孝夫が弁慶と富樫を朝日座と南座でそれぞれに替ってつとめてました。私も富樫はやりたかったけどずっと義経でした。でも父が教えるのをよく見えましたから、今でも富樫を教えることはできますよ」

秀太郎さんは父に似て記憶力が抜群で、今では若い役者たちがいろいろと教わりに来ているらしい。

話は戻るが秀太郎さんが初舞台を踏んだころ、一家は大阪から京都の祇園町に移り住んでいた。

そのころ、上方では歌舞伎が隆盛ではなくて、決して豊かな暮しではなかったが、それでも顔見世の千秋楽や記念日には夕食のあとに楽しい余興があったという。

「そう、張り切るのは大抵お弟子たちで、声

色とか小咄とかをよくやってました。まだ学生服着てたころの當十郎(昭和十四年生まれ)が、時播歴(三代目時藏)『暫』のつらね(花道での長ぜりふ)を言ったりね、番頭の伊藤が『どんどろ』(『傾城阿波の鳴門』)のお弓のせりふを披露したり。伊藤は女方がやりたくてしょうがないの。

あのころは楽しかった。みんな芝居が好きで、みんな旦那(父仁左衛門)に惚れてましたからね」

私はその伊藤友久という古い番頭さんに何度か会っている。「旦那」が何より自慢で、私が頼むとすぐに会わせてくれた。おかげでずつとあとになって書いた私の『芸づくし忠臣蔵』に、大松嶋の由良之助の芸談を入れることができた。

「伊藤は父の仁左衛門襲名(昭和二十六年)までは普通にお客さんだった人なんです。それが父に惚れこんで番頭になって、苦しい時代も長かったのに、とうとう四十三年うちに

いましたからね。平成五年に亡くなりましたけど、番頭さんの葬式であんな立派なの見たことない、というくらい立派でした。歌右衛門さんや梅幸さん、すごい方々からお花が届いたりね。

父が亡くなったのはその翌年でしたから、伊藤は葬式の露払いまでしてくれた、って話になってね」

この七月、私は大阪松竹座へ芝居を観に行き、客席で偶然元南座支配人の伊藤友己さんに遭い、一瞬、番頭さんの伊藤さんかと錯覚した。

「ああ、あの人ね、伊藤さんの息子。いつとき父の弟子になって、片岡銀杏ぎんなんという名前だったんだけど、へたくそで(笑)、でもそれが幸いして松竹へ入って出世しましたから、よかったんですよ」

それで昔の片岡家の愛犬と番頭の伊藤さんとの感動的な物語を聞くことができた。

「私が子供のころ、うちにボビーという犬が

いましてね、テリアみたいな雑種でしたが、なぜか伊藤のことが嫌いで、来ると帰るまで吠えてました。そのボビーが野犬狩りに捕まってるね、伊藤が迎えに行っただけです。声を聞いたら飛んで出てきたそうですよ。それからもう伊藤は命の恩人だということで、来ればすっかり奉っちゃって、シツポは千切れんばかりに振って、喜んでもう大変（笑）」

松竹座での秀太郎さんの「寺子屋」（『菅原伝授手習鑑』）園生そのおの前がとてもよかった。特別なことを何もしないで、ちゃんと菅承相（菅原道真）の御台所みだいどころに見える。

「幕切れ近くに出てきて舞台のまん中へ座ったときに、今の感覚で言えば源藏夫婦に対して『御機嫌よう』という気持を表わしたくなる。前の場面で自分の子の菅秀才を預けてこんな世話になってるんだからね。また松王に対して実の子の小太郎を身替りに立ててくれたんだから『有難う』と頭を下げたいところだけど、それをしてら御台様じゃなくな

るわけよ。それで何にもせずに目の色だけで感謝を現すわけ」

松王丸は仁左衛門。右肩の手術で長いこと芝居を休んでいたが、久しぶりの熱演の舞台だった。

松嶋屋三兄弟は、長男の我當が秀太郎さんより六つも上だし、関西歌舞伎の低迷期には父十三代目の考えで東京の二代目松緑のところに預けられていたので、残った下の二人は仲がよかった。

「孝夫は私の三つ下。おっとりした子で、どこへ行くにもお兄ちゃん、お兄ちゃんといてくるので、私も可愛がってあちこちへ連れ回していました。そのうちに父の自主公演『仁左衛門歌舞伎』で、孝夫が『女殺油地獄』の与兵衛で評判を取って、どんどん売れ出したものですから、正直言つて兄としてちょっと焦った時期もありました。でも彼は本当によく勉強しているし、努力してますね。

以前は『吉田屋』の伊左衛門でも、父が演じていた通りに私が演じてみたい、という気がありましたけど、今はそう思わなくなりました。彼は父の伊左衛門を基本に彼なりの伊左衛門を立派に作り上げましたからね。偉いと思うし、私は尊敬しています」

鏡花の『天守物語』の富姫ではないが、「涼しい言葉だこと」と言いたくなる。

「だって、私は荷が重いのが苦手。弟が大好きなお父ちゃんの名前を継いでくれて本当によかった、と思っっているんです。松王にしても菅承相にしても、由良三助にしても権太にしても、彼はいろんな芝居でお客様を喜ばせている。子供のころ、私が弟をあちこちへ引っ張って行きましたけど、今は私が十五代目仁左衛門に引っ張ってもらっているんです」

こういう気持のきれいが、秀太郎さんの舞台を爽やかであたたいものにする。

『義経千本桜』『木の実』の権太女房小せんは若いのがみの権太が通いつめた遊女上がり

の、多分姉さん女房で情が深い。子供の善太に入れ智慧してたまには一緒にうちに帰って、とせがませ、花道七三では子供をおぶった権太の前に秀太郎さんの小せんが嬉々として先に立つ。

仁左衛門さんの権太が笑顔で言う。

「こうして後ろ姿を見ると、まだまだ瑞々しいやないか」

仲のいい兄弟共演がほほえましく、幸せな気分が客席にあふれる。

「私の南座顔見世の時の楽屋はね、仁左衛門の楽屋入りを待つ芸、舞妓が待っている待合室なの（笑）。

最近是他の若手俳優のファンの待合室まで兼ねてるの（笑）」

（この項つづく）

浄土誌上句会

●馬

〈特選〉

パドックの馬の睫毛に緑雨かな

会田 一朔

出走馬の下見である。ゆっくり歩く馬の様子を、一頭一頭注意して見て行く。あいにく小雨まじりの日で、長い睫毛にも雨滴が光っている。馬体も一層つやつやしている。馬も人もいよいよ緊張してくる。

〈佳作〉

朝露にひたすら走る駿馬達

森 懐人

千し草を抱えて馬術部の少女

富永亜由美

初夏の日のさすがに馬の歩みかな

山口 信子

●意

〈特選〉

青嵐意外に重き優勝旗

井村 善也

野球そのほか屋外での競技のどれかを、読み手が勝手に決めればよいのだろう。受け取った本人としても、選手が一人ずつ持つては

喜んでゐる様子と見てもよいだろう。「意外に重き」が皆の喜びを伝えている。

〈佳作〉

如意観音狐の提灯咲き誇る

佐藤 雅子

不意打ちのように夕焼け空となる

有田 美紀

其処彼処蟻が出ると注意札

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

新築の軒下にはやつばめの巣

東

保

燕は同じ集落に帰ってくるし、古巣があればそこに戻ってくる。この燕は新築の軒下を選んだのだ。新しい家に新しい巣が作られたというので、家ではめでたいことと喜んでゐるのだろう。昔から幸せをもたらす鳥だ。

〈佳作〉

亡き夫に面影似たり五月闇

當麻あさ子

田水張り映りし山に真向かいぬ

池田 伊吹

燕の子十日目にして声を上ぐ

増田 信子



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

当為自由題

誌上句会〈編集部選〉

■馬

流鏑馬の神事に躍る杉木立
街中に馬頭観音百日紅
馬車の道座して静かに桃を売る
ががんばや馬の嘶き通り過ぐ
悍馬汗噴けば一瞬にして塩
瘦せ馬に付かず離れず蜆蝶
夕虹と老いたる我と農耕馬
馬面の二人向き合ふ曹達水

■意

晴着着るたび意地わるき夏の雨
慎ましや入笠山の如意菫

森 懷人

當麻あさ子

早乙女喜栄子

佐藤雅子

内藤隼人

森脇祐司

結城博光

新山瑠美子

森 懷人

當麻あさ子

締切・二〇一四年九月二十日

発表・『浄土』二〇一四年十一月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

● 葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

意志ありや塗りつぶされし山みどり

耳に棲む意味を教えよ蝸牛

病葉へ他意なく横殴りの雨

露台から犬来てズボン嗅いで去る

吸殻と酒と蚊遣と花鋏

用意した手火花むなし岸の雨

舟虫の無意味に溢れ出す速さ

青鳶の意思あるごとく這ひ上る

■自由題

雨上がり額あじさいに結び文

その風の道示すなり夏柳

人ごみの沖に消えゆく夏帽子

春夫忌や学童疎開の児童くる

初夏のささくれているベンチかな

白南風や港町には旗多し

真昼間を横切つてゆく瑠璃蜥蜴

八月のピーピーケトル鳴る正午

早乙女喜栄子

田中 昇

進藤涼子

鈴木 徹

富田倫朗

斎藤秋彦

仁科仁志

光谷壮一

森 懷人

八木沢絵里

奈良由希江

佐藤雅子

三浦曜子

藤沢 蘭

梅崎喜朗

井崎塔子

さっちゃんね

かまちのりう



編集後記

台風と共々師の訃報

岱潤

七月十日の朝、ノグリー（韓国語で狸）と名のついた大きな台風八号の報が刻々と告げられている中、鎌倉光明寺の宮林昭彦台下の訃報が届きました。余りに突然の報に言葉を失いました。

その後お話を伺うと、昨年十一月に病気を告げられてから、むしろ台下はそれまで以上に公務を入られ、北海道や東北などへの巡教、そして亡くなる直前にも長野へ結婚式の戒師など、とうてい考えられないほどの法務を、医者と争ってまでなさっていたと聞きました。亡くなる前日にも浄宗会（大本山の執事長会）

の御導師として垂示を立派にお務めになり、その後高熱を出されたということです。

表紙裏のお言葉は台下の『看病用心鈔』のころからの引用です。台下は良忠上人の『看病用心鈔』の内容を要約して、『良く生きることとは、よく死ぬこと』と完結したひとことに言い切りました。そして正にご自身の最期が、この言葉を見事なまでに実践されたようなお姿であつたと思いました。

宮林台下が本誌に寄せた思いの深さは計り知れませんが、昨年本誌の編集会議というところで鎌倉にお邪魔したとき、ホテルで蟹三昧の料理をご馳走していただき、その後バーにまでお誘い頂いて、笑顔い

っぱいの楽しげであつたあのお姿が、最後になつてしまいました。人とのおつき合いをとにかく大事にされ、気遣い、ご指導してくれた台下でした。ありがとうございました。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十卷九月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十六年八月二十日

発行 平成二十六年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 太室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三（三）五七八六九四七

FAX 〇三（三）五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』 特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
巖谷勝正（目黒・祐天寺）
魚尾孝久（三島・願成寺）
大江田紘義（仙台・西方寺）
加藤昌康（下北沢・森巖寺）
加藤亮哉（五反田・専修寺）
熊谷靖彦（佐賀・本應寺）
糸原恒久（川越・蓮馨寺）
佐藤孝雄（鎌倉・高德院）
佐藤成順（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光圓寺）
東海林良雲（塩釜・雲上寺）
須藤隆仙（函館・称名寺）
高口恭行（大阪・一心寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村康雅（清水・実相寺）
中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
野上智徳（静岡・宝台院）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
堀田卓文（静岡・華陽院）
本多義敬（両国・回向院）
真野龍海（大本山・清浄華院）
脳博之（網代・教安寺）
水科善隆（長野・寛慶寺）
（敬称略・五十音順）

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

美味探訪



み　よ　かわ

本誌『浄土』を長くご指導いただきました大本山鎌倉光明寺の宮林昭彦ご法主が、去る7月10日、82歳で御遷化されました。

毎夏、鎌倉を訪ねる我々編集部員に必ず『御代川』の葉山牛しゃぶしゃぶのおもてなし。2階の部屋で70年数年にわたる『浄土』の話、法然上人への思いを拝聴させていただきました。大変有意義で貴重な時間でもありました。

今回は先生を偲んで『御代川』をご紹介します。

鎌倉から徒歩10分ほどの海よりに、合掌造りの本店があります。

創業者の御代川鯉之助は戦前、関東指折りの名店『新喜楽』で最年少の料理長をしており、料理界5本の指に入る人で、特に「煮物の神様」と呼ばれていたそうです。戦後赤坂に高級料理店を開業し、政界人、財界人はもちろん、画家の棟方志功、前田青郎、奥村土牛、作家の川端康成などにも愛され、また、鎌倉に移転後は、鶴岡八幡、大本山建長寺（もちろん大本山光明寺も）などの料理御用を務められています。

京料理が主体ですが、三浦半島で育てられた黒毛和牛の逸品「葉山牛」のしゃぶしゃぶは、脂肪に甘味・旨味があり、とろけるような舌触りが忘れられない美味しさです。他に懷石料理、和食膳、お弁当と地場の素材を生かした料理も絶品。是非ご賞味ください。1階は椅子席、2階は少人数から100名近くまでのお座敷になっており、また、多くの美術品が楽しめるお店です。

[illegible]

神奈川県鎌倉市由比ヶ浜2-22-5 鎌倉駅東口下車徒歩10分

0467-23-0911

営業時間 11:00~21:00(20:30 LO) 定休日 年中無休(元旦休み)

葉山牛しゃぶしゃぶ 5985円～ 懐石料理 8400円～ お弁当 2369円～

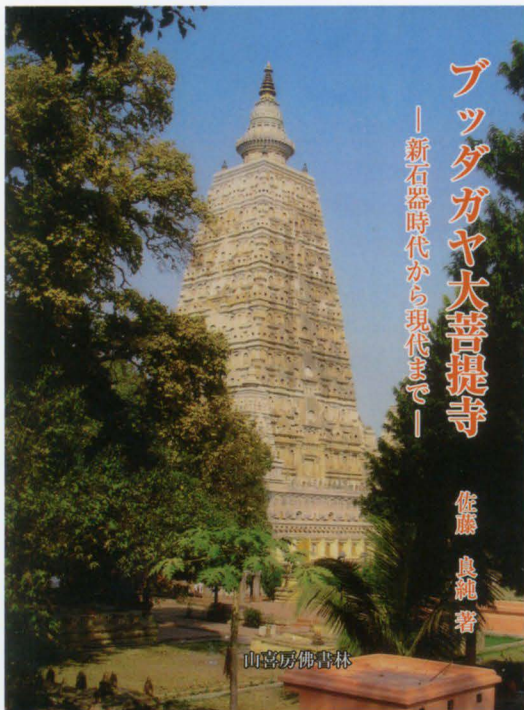
大好評、在庫僅少！

ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著

ブツダガヤ大菩提寺
―新石器時代から現代まで―

佐藤 良純 著



ブツダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円